Gallery PARC
GRAND MARBLE

藤永覚耶

前谷康太郎

宮崎雄樹

【宮下忠也／本展キュレーター】

【sequence:A】
2014年12月02日[火] ── 12月14日[日]

【sequence:B】
2014年12月16日[火] ── 12月28日[日]

11:00～19:00
月曜日休廊・金曜日20:00まで・最終日18:00まで

VANISHING POINT 消滅点

【sequence:B】

最も基本的な描画技法のひとつである透視図法には、奥に向かう平行線が集まる「Vanishing Point／消失点」が存在します。この消失点は、例えばレオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』において、均整のとれた三次元空間を構築しているのみならず、見る者の視線をキリストへと誘う役割を果たし、更には「万物の中心としてのキリスト」の存在を示唆することで世界の捉え方そのものまで表現しています。

しかし、本展覧会で取り上げる藤永覚耶、前谷康太郎、宮崎雄樹の作品には、消失点が明確に設定されていません。その代わりに、独自の技法により作品に「Vanishing Point」、消失点ではなく「消滅点」が導入されているのです。

藤永覚耶は、染料インクによる色彩のドットで描いた像を、アルコールの浸透圧でゆっくりと溶かしていくことで、像が消失する一歩手前に現れる「イメージが個人の主観から開放され、広く共有される瞬間を画面に定着させようと試みています。前谷康太郎が自作の撮影機で記録した風景は、撮影機の構造特性により明確な像を結ばず、抽象化されたフォルムと色彩、光の明滅にまで還元されます。見えているはずのものをよく見えない状態にまで減退さることで、「わたしたちが見ているもの」さらには「見るという行為」の本質に迫ろうとしているのです。そして宮崎雄樹は、アクリル絵具で描いた風景を蜜蝋でコーティングし、その上から油絵具で加筆するという手法を用います。乳白色の蜜蝋が中間層となり、アクリル彩の下層と油彩の表層の間に空間的なズレが生じ、さらにアクリル絵具と蜜蝋、油絵具という異なるメディアが質感のズレをも生み出します。その作品は、人間の記憶の曖昧さや感覚のゆらぎをも取り込み、見るものに強い共感を呼び起こすでしょう。

消滅点。それは今を生きる私たちの体感覚に則した、広く共有しうる世界観なのではないでしょうか。本展覧会では、より作品の魅力に触れていただけるように、会期をシークエンスAとシークエンスBの2期に分け、それぞれ異なる展示をおこないます。

本展キュレーター

宮下忠也　MIYASHITA, Tadaya

1976　京都府生まれ
2002　京都精華大学大学院芸術研究科造形専攻 修了
2005　同志社大学大学院アメリカ研究科アメリカ研究専攻 修了

おもな展覧会
2014　HAPPY SPOT TOUR!（展覧会キュレーション、奈良県文化会館）
—　山岡敏明：Phangutic（展覧会ディレクション、GLAN FABRIQUE la galerie／大阪）
2013　山岡敏明：GUTIC MERISTEM（展覧会ディレクション、Gallery PARC）
—　存在と生活のアートVol.5：SUPERPOSITIVE（展覧会ディレクション、A/A gallery：アーツ千代田／東京）
2011　SUPERPOSITIVE：世界への愛着（展覧会キュレーション、日図デザイン博物館／京都）
2010　丹波国分寺跡アートスケープ（アートイベントプロデュース、丹波国分寺跡地／京都）
2009　現代美術展Mirage（展覧会キュレーション、同志社大学京田辺校地／京都）

おもな論文／講演
2014　多様な表現をアウトプットする（講演、福祉をかえる「アート化」セミナー、たんぽぽの家アートセンターHANA／奈良）
2010　現代美術家、村上隆への称賛と拒絶：オリエンタリズムとセルフ・オリエンタリズムの観点から（研究ノート、同志社アメリカ研究46号）
—　現代美術家、村上隆と日米間の文化的接触（研究発表、アメリカ学会文化芸術史分科会、大阪大学）
2009　グローバリゼーションと現代美術（講義、同志社大学社会学部教育文化学科）
2008　Takashi Murakami and His Works in the U.S. and Japan: The Making of Transpacific Murakami and US-Japan Cultural Disjunction（研究発表、国際シンポジウムPacific Crossings: Cultural Bridges between Japan and the United States、同志社大学）

おもな映画
2013　メサイア：漆黒ノ章（美術監督、2013年劇場公開）
2012　ヲ乃ガワ：WONOGAWA（美術監督、2014年劇場公開）
2005　イケルシニパナ（美術監督、2006年劇場公開／ウェブ配信）
2002　グシャノビンツメ（美術監督、2004年カナダ・モントリオール・ファンタジア国際映画祭グランドプレーカー銀賞受賞）

アルコール染料インクを用いた平面図像（絵画）を表現手段とし、作品と空間と見る者の関係を探っている。

自分の制作は、写真から得た図像を元に自分の手を通して綿布の上に色彩のインクの点を置いてゆく。最後に、時間をかけて溶かしインクを動かすことで、色彩の点は混ざり合い、移動の痕跡や滲みを綿布に残す。そのようにして、作品の図像を制作する。

アルコールの浸透圧に委ねられたイメージは、綿布の染みになると同時に、個人の主観を離れ、他者と共有しうるイメージへと昇華していくように感じる。

それらを壁面展示のオーソドックスな絵画形式のシリーズと、自然光を図像に反映させ空間と作品をダイレクトに結びつけたシリーズの2つの展示形式で作品展開している。

作品は、部分である色彩性と、それらの集合としてある全体像、この両者のゆらぎによって成立している。あるときは、作品に近付くことで色彩同士の緊張関係や美しさを見いだすかもしれない。また、あるときは、全体の像に自らの経験から何かのイメージを見出すかもしれない。それらはすべて、同一の単なる綿布の色彩の染みが引き起こすことだ。

何ものでもない色彩と何かであることとの緊張関係の中で、作品・空間・見る者、それぞれが相対的な関係となり相互作用するような絵画を目指している。

藤永覚耶　FUJINAGA, Kakuya

1983　滋賀県生まれ
2006　京都嵯峨芸術大学芸術学部造形学科版画分野卒業
2008　愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了

おもな展覧会
2013　APMoA Project, ARCH Vol.6 藤永覚耶（愛知県美術館）
2012　foliage（Masayoshi Suzuki Gallery／愛知）
—　とどまり ゆらめく keeping : moving（Gallery PARC）
2011　- into the water -（GALLERY GOHON／愛知）

おもなグループ展
2014　BIWAKOビエンナーレ2014（滋賀）
—　落石計画第７期：残響（旧落石無線通信所／北海道）
2013　Gallery Ort Project Closing Event（Gallery Ort Project／京都）
—　アーティストファイル05：Part 2（Masayoshi Suzuki Gallery／愛知）
2010　アーツチャレンジ2010（愛知芸術文化センター）
—　STAY：常懐荘にて（旧竹内邸・常懐荘／愛知）
2009　版画／視座／作家たち（ギャルリ・プチボワ／大阪）
2008　Thinking Print vol.2 :もうひとつの写真表現（京都芸術センター）

おもな受賞
平成25年度滋賀県次世代文化賞
平成23年度平和堂財団芸術奨励賞
第31回全国大学版画展　町田市立国際版画美術館美術館収蔵賞

「より（more）見る」のではなく、「一歩退いて（less）見る」こと。

動画／静止画を問わず、現代の諸々のイメージは「より見たい」という欲求のベクトルに従った暁の到達点として存在する。しかし、それとは逆方向のベクトルに従ってみたとき、予測不可能かつ純粋な光の形態が存在する。

この一歩退いた領域において我々が見るのは、目前の世界の別のありようであり、「見る」ことを為す我々自身の後ろ姿でもある。

前谷康太郎　MAETANI, Kotaro

1984　和歌山県生まれ
2008　東京外国語大学外国語学部　卒業
2010　京都市立芸術大学大学院　修了

おもな展覧会
2014　further/nearer : emergencies!021　（ICC／東京）
2013　distance　（梅香堂／大阪）
2012　ALA　現代の表現1（前期）　前谷康太郎　（アートラボあいち／愛知）
—　parallel　（CAS／大阪）
2011　(non)existence　（梅香堂／大阪）
2010　things once existed there　（此花メチア／大阪）

おもなグループ展
2014　ART OSAKA 2014　（ホテルグランヴィア大阪）
—　Future Tense　（Yoshiaki Inoue Gallery／大阪）
2013　Art Court Frontier 2013（Art Court Gallery／大阪）
2012　Spring：日常　（梅香堂／大阪）
—　woodlandgallery2012（みのかも文化の森／岐阜）
—　HANARART 2012　（大和郡山市旧川本邸／奈良）
2010　seasons for Morris lab. / etude for 4 monitors　（森巣ラボ／大阪）

おもな上映
2008　ヤングパースペクティブ2008　（イメージフォーラム／東京）

＊2015年2月6日よりGallery PARCにて個展「World in Motion」開催予定

宮崎雄樹　MIYAZAKI, Yuki

1982　大阪府生まれ
2005　大阪芸術大学芸術学部美術学科　卒業

おもな展覧会
2013　Gallery Den mym／京都
2011　トーキョーワンダーウォール都庁2011（東京都庁／東京）
2010　信濃橋画廊／大阪
2009　ギャラリーメゾンダール／大阪

おもなグループ展
2014　「f -エフ-」（伊藤美術店／名古屋）
—　第9回大黒屋現代アート公募展　（板室温泉大黒屋／栃木）
2013　京都アートフェア：美しいと出会う　（みやこめっせ／京都）
—　シェル美術賞展2013　（国立新美術館）
2012　ART AWARDNEXT 2012　（東美アートフォーラム／東京）
—　Xmas Art Festa 2012: CADEAUX　（相模屋美術店／東京）
—　西脇市サムホール大賞展　（西脇市岡之山美術館／兵庫）
2011　大阪芸術大学美術学科作家展　（ギャラリーkazahana／京都）
—　トーキョーワンダーウォール公募2011　（東京都現代美術館）
2010　EXPOSITION "Nouveau 2010"　（ギャラリーメゾンダール／大阪）
—　一日だけの展覧会：ハガキ　（信濃橋画廊／大阪）
—　こきり展　（ギャラリー閑／三重）
2009　独立展　（東京都美術館、国立新美術館）
2008　thing matter time 2008　（信濃橋画廊／大阪）
—　API2008展：国際交易における芸術企画（三重県総合文化センター第１ギャラリー）
—　三重県展　（三重県総合文化センター）

おもな受賞
2013　シェル美術賞展2013　木ノ下智恵子審査員奨励賞
2012　ART AWARD NEXT 2012　青年会賞
2011　トーキョーワンダーウォール公募2011　トーキョーワンダーウォール賞
2010-11　第25回ホルベインスカラシップ奨学生
2006　第2回市展：いが　岡田文化財団賞

コレクション
兵庫県立美術館：信濃橋画廊コレクション

周りとの距離をテーマに制作しています。

日常の風景や情景を観察すると、一歩引いて観てしまう事があります。それと同時に、自分の存在価値や自分が立っている位置を考えてしまいます。鑑賞者が作品を観て、以前どこかで感じた記憶とのリンク・共有、または私が想像もしない感覚を与えられたらと思っています。

また素材として蜜蝋を使用しています。アクリル絵具で描いた画面に蜜蝋を流し込み、その上に油彩で描画。蜜蝋によって下層と微妙な距離感が生まれます。そして通常の絵具とは違う何とも言えない独特な表情を見せてくれます。

自分がみた光景を絵のモチーフにしていますが、カメラを使うことで無意識にいい構図やアングルを切り取っているように思います。それは自分の意識だけでなく外部からの刺激によって成り立ちます。またその背景には、気づかないうちに現代社会の膨大な情報によって支配されていることがあると思います。

カメラのシャッターが下りる（幕が下りる）ことが、作品画面で言うと蜜蝋がフィルター代わりとなっていると同時に、蜜蝋特有の乳白層は、どこかで見た光景などと想像する、曖昧な記憶とも結びつきます。蜜蝋によって感じるのは記憶の曖昧だけでなく、その光景との微妙な距離感でもあるのではないでしょうか。

展示作品｜Works　【sequence:B】

藤永覚耶

＊展示壁面左から

untitled [1308]
2013
1450×2250mm　アルコール染料インク、綿布、パネル

foliage [mass] [1201]
2012
530×455mm　アルコール染料インク、綿布、パネル

foliage [mass] [1203]
2012
530×455mm　アルコール染料インク、綿布、パネル

sheep [1406]
2014
1170×1620mm　アルコール染料インク、綿布、パネル

＊階段上壁面部分

foliage [1201-1204]
2012
841×594mm×4点組　アルコール染料インク、綿布、パネル

宮崎雄樹

＊展示壁面左から

ニュートラル ─ TOUHAKU
2014
606×910mm　キャンバス、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

My distance
2014
150×105×10mm　ガラス、アクリル絵具、化学系ワックス、蜜蝋、油絵具

モデルと絵描きと僕
2014
333×455mm　キャンバス、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

＊コンクリート壁面左から

臨界
2014
318×410mm　キャンバス、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

stroll
2014
380×455mm　キャンバス、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

トリップ
2014
227×158mm　綿布、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

＊入口カウンター横

いつかの風景
2014
89×127mm×2点組　鏡、ガラス、アクリル絵具、蜜蝋、油絵具

前谷康太郎

＊暗室内作品

further/nearer 2012
2012
ビデオインスタレーション　サイズ可変、2:56
暗室、特設スクリーン、プロジェクター、Mac

＊モニター作品

landscape(slit)
2013
ビデオインスタレーション、サイズ可変、約40分
CRTモニター、ビデオスプリッター、HDD

＊本展は12月2日[火] ── 12月14日[日]までを【sequence:A】、12月16日[火] ── 12月28日[日]までを【sequence:B】として、展示替えにより、それぞれの作家の異なる作品を展示しています。

本展は、藤永覚耶、前谷康太郎、宮崎雄樹の3名の作家と展覧会キュレーター・宮下忠也から成り、その会期を2週間ごとの［シークエンスA］・［シークエンスB］と分けて連続で開催するものです。

絵画における一般的な遠近法である「 Vanishing Point／消失点 」の存在は、画面上に奥行きを与えることで三次元的空間を構築するだけではなく、鑑賞者の視線を意識的に引き込む効果により、その作品の主題や描き手の意図を示唆する役割をも担います。本展のキュレーターである宮下忠也は、この視点を展開させ、今日的な絵画表現の中に消失点ではなく「消滅点」という特異点を見出し、そこから作家・作品へのひとつの読み解きを構築しています。本展の出展作家である藤永覚耶、前谷康太郎、宮崎雄樹の作品には、いずれも明白な「消失点」は不在のままに、独自の技法による「Vanishing Point」＝「消滅点」が導入されているといえます。

染料インクの点描による図像をアルコールにより溶かし、図像が消滅する寸前に現れる「イメージが個人の主観から開放され、広く共有される瞬間」を画面に定着させようと試みる藤永覚耶。構造上の特性により明確な像を結ばない自作の撮影機によって、世界を抽象化されたフォルムと色彩や光の明滅にまで還元する作品を発表する前谷康太郎。アクリル絵具による風景画を蜜蝋でコーティングし、その上から油絵具で加筆するという手法を用いた絵画制作を続ける宮崎雄樹。

ここに見られるそれぞれの「消滅点」は、いずれも異なる意識・要求や技法によって作品に内包されたものですが、個々の表現にとって大きな役割を果たしているのは間違いありません。宮下はそれぞれの作品をへの理解を深めるための共通項として、ここに「消滅点」というテーマを挙げるとともに、それらを「今日の私たちの体感覚に則した、広く共有しうる世界観なのではないでしょうか」として、鑑賞者に作品を通じた世界への読み解きを促します。

本展覧会では、そのテーマや個々の作品の魅力に触れていただけるように、会期を［シークエンスA］・［シークエンスB］の2期に分